

かたちが消えたスタルク “されどトイレ!”

最近ではゴージャスなシャンデリアを飾るのがはやりようだ。2004年、チューリッヒを訪れた時に造船工場を劇場に改修し、ガラとしたホワイエに続くレストランへ案内された。着いた時はまだ明るかったのだが、帰る頃には日も暮れ、シャンデリアの優美な明かりと内装のミニマムデザインの固さの組み合わせがとても斬新に目に映った。外からアクセスすると、下方2/3はすりガラスで食事をする人々の姿や家具を隠し、上部の透明な部分にシャンデリアのみが、キラキラと浮かび上がる趣向である。

翌年、パリで古い建物を改修した「バカラ美術館」[*]を訪れた。ここもバカラのシャンデリアが入り口のホール、階段の吹抜けに吊るされ、古風で荘厳な石のインテリアに相対し輝いていた。フォルマリストのフィリップ・スタルクの手によるものだが、インテリアのみなので、墨田川沿いのビール会社の金色の雲のような強い主張は抑えられ、かといって建築の存在感にも負けてはいない。あいにく美術館は休館。しかたなく店内を見た後レストランをのぞき、せっかく来たのだから後は「トイレ」と言いつつ壁と同じような白い扉を開け、あっと立ちすくんだ。学生数人と友人の5人が一緒に優に入れる広さのパウダールームは全面カガミ、透明感のあるルージュ（ワインレッドでもボジョレーヌーボーのさわやかだが深みもある色）の空間はまるで万華鏡に入り込んだよう。しばし、不思議な至福の時を過ごしたのである。カガミは幾つかの種類（透明、レッド、黒みがかかったもの…etc.）が分割してタイルのように張り込んである。相互に映し合うことで無限に展開するフラクタル現象を効果的に用いていた。全面カガミ張りなのに自分の姿は気にならない、トイレとしても十分落ち着ける空間であった。いつものチャームングなフォルムは消えて、ファンタスティックであてやかな空間がそこには残された。

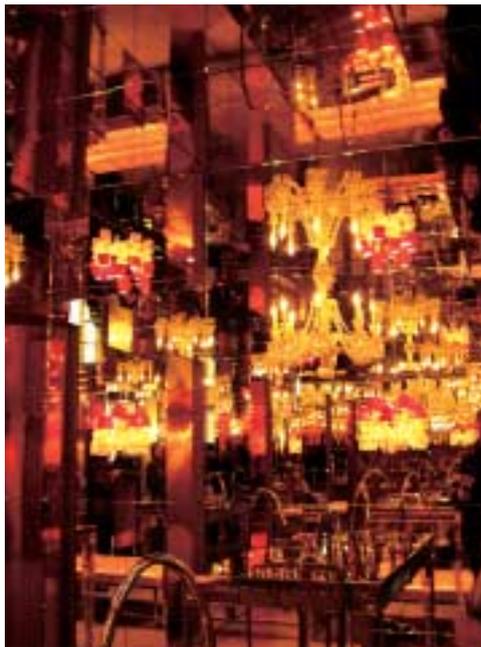
トイレにしては十分広く、鑑賞空間としては少し狭いが挑戦するには程良い空間。デザイナーの意思が十二分に反映された空間がそこにあった。… “されどトイレ!”。*

【*】バカラ美術館（改修：2004）P.スタルク

ひらくら・なおこ——平倉直子建築設計事務所／日本女子大学住居学科卒業。1978年、平倉直子建築設計事務所設立、現在に至る。
主な作品：常盤台の住まい（1997）、森の小径と鹿沢インフォメーションセンター・上信越高原国立公園 鹿沢園地 自然学習歩道施設整備（2007）など。



レストラン「La Salle」 お酒のボトル棚の赤いラインの照明がきいている（写真提供：内藤太一）



上——分割したガラスにより一層、空間が限りなく続いているように見える
左——ドアの内側は赤いガラス張り。床はシンプルな白